

# 第79回二松学舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十一年七月三日（土）  
場所 千代田校舎五〇五教室

## 講演

### 幕末明治初期の日本漢文小説

——志人小説を中心として——

筑波大学名誉教授 内山 知也 先生

## 研究発表

### 《国文学》

#### 中島敦「憑」論

——「古譚」としての「孤憑」——

博士前期課程 二年 奴田原 諭

昭和十七年、中島敦最後の年に「古譚」の総題の下、『光と風と夢』に収められて「孤憑」は初めて世に問われた。

中島が自らの作品に総題を付すことは広く知られていよう。「過去帳」がそれであり、「古俗」がそれである。総題の付されていること、そこには何らかの書き手の積極的意図が含まれているのだろう

か。

「古譚」の場合、個々の作品はその舞台、登場人物、果てはその時代までも異にする。一見何の関連性も見出し得ないそれぞれに共通するものは何か——、それが存在するのであれば、それこそ「古譚」の総題の下に存在する個々の作品の主軸となる問題と云い得よう。今回は「古譚」という大きな枠組みを視野に入れつつ、その一構成要素として「孤憑」を読んでゆく。そこには悲劇の人「李徴」を描いた「山月記」との類似点が見出せるはずである。

#### 三島由紀夫「月澹荘綺譚」研究

博士前期課程 二年 木津 奈々江

『月澹荘綺譚』は「ミステリー要素の濃い作品」という評に終始し、従来独立して論じられることのなかった作品である。

しかし三島の作品群で多く扱われている「目」の問題——「見る」行為の問題を視野に据えるならば、「只管に見つめる目」の問題を含んだ本作品は、決して看過してはならない作品と言えよう。

本発表は作品中の、嘗て月澹荘に仕えていた老人の言葉、「少くとも私にはすぐにわかりました。殿様の屍體からは両眼がゑぐられ